

学会ハイライト

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会

(平成30年11月16日～18日, 奈良春日野国際フォーラム)

浅田 秀夫

奈良県立医科大学皮膚科学教室 教授

はじめに

第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会・学術大会を, 2018年11月16日(金)～18日(日)の3日間, 奈良市奈良公園内の奈良春日野国際フォーラムにおいて開催させていただきました(図1, 2). 奈良県での本大会の開催は初めてであり, 奈良県立医科大学皮膚科学教室にとってたいへん名誉なことだと感じております.

本学会はこれまでに2回の統合・改称を経ていきます. 2007年に「皮膚アレルギー学会」と「接触皮膚炎学会」が「日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会」として統合され, さらに2017年には「日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会」と「皮膚脈管・膠原病研究会」が統合され, 「日本皮膚免疫アレルギー学会」として新たなスタートを切りました. したがって, 今回の大会は日本皮膚免疫アレルギー学会として, 統合後に初めて開催される記念すべき大会です. 節目の大会にふさわしく, 3日間の参加者の総数は1,000名を超え, 演題数も187題(一般演題156題, ポスターセッション31題)と多くが寄せられ, 活発な発表が行われました. 以下に本学術大会の概要を報告します.

学会のテーマと特別企画

今回の学術大会のテーマは, 「皮膚免疫アレルギー学の醍醐味を探る」としました. 学問の原点

に立ち返って, 皮膚における免疫アレルギー現象の巧妙なしくみを知る感動を共有できるような学会にしたいという思いを込めました. さらに, 皮膚の免疫アレルギー現象は近年目覚ましい勢いで



図1 第48回日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会のポスター



図2 学会場(奈良春日野国際フォーラム)の風景。瓦葺きの美しい建物で、背後には若草山が広がっている。

解明されつつありますが、その研究成果が臨床応用に直結していることを再認識していただけるような学術大会を目指しました。すなわち、本大会が基礎研究と臨床の橋渡しとなり、「皮膚免疫アレルギー学の醍醐味」を実感していただく機会を提供できればと考えました。

ご承知のとおり、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会は、これまでわが国における皮膚アレルギー疾患の診療、研究、教育の発展に大きな役割を果たしてきましたが、さらに皮膚脈管・膠原病研究会と統合することにより、皮膚科領域の免疫アレルギー疾患をほぼすべて網羅できる学会に進化し、会員数も1,750名を超えました。そこで「特別企画」として、双方の会の歴史を熟知し、今回の統合を主導された片山一朗先生(大阪大学名誉教授、大阪市立大学特任教授)に両会の歩みと今後の展望についてお話いただきました。

特別講演

今大会の目玉となる特別講演は、4名のご高名な免疫学者にお願いしました。京都大学理事・副学長・プロボストの湊長博先生には、免疫老化の

メカニズムと疾患との関わりについて最新の知見を紹介していただき、また、大阪大学呼吸器・免疫内科学教授の熊ノ郷敦先生には、近年のわが国における免疫研究の目覚ましい発展の歩みとその臨床応用についてご講演いただきました。いずれも興味深いテーマを初心者にもわかりやすくお話しいただきましたので、免疫学を幅広くかつ深く理解する一助となる有意義な講演となりました。また、海外からはスイスZurich大学のLukas Flatz先生、アメリカOregon Medical Research CenterのAndrew Blauvelt先生をお招きしました。Flatz先生には免疫チェックポイント阻害薬の代表であるPD-1阻害薬による皮膚障害と抗腫瘍効果との関係について最新の研究成果をご紹介いただきました。また、Blauvelt先生にはアトピー性皮膚炎ならびに乾癬の病態と、その治療における生物学的製剤の位置づけについてわかりやすく整理して解説いただきました。いずれの講演も盛況でしたが、近年の免疫学の進歩を背景に臨床応用が急速に進んできている分野であり、参加者の関心の高さがうかがえました。



図3 パッチテストハンズオンセミナーの風景

血管炎・膠原病の基調講演

今回新たに守備範囲に加わった脈管疾患と膠原病の分野については、それぞれ第一人者の先生に基調講演をお願いしました。川上民裕先生(東北医科薬科大学皮膚科教授)には皮膚科領域の血管炎の鑑別診断について実践的なお話をいただき、藤本 学先生(大阪大学皮膚科教授)には皮膚筋炎を例にとり、皮膚科の立場から提唱する膠原病診療の新たなパラダイムシフトについてご講演いただきました。血管炎、膠原病の診療における皮膚科医の役割の重要性を再認識できる有意義な内容でした。

シンポジウム

シンポジウムでは、皮膚免疫アレルギー疾患を網羅できるよう、「膠原病」「薬疹」「自然免疫・皮膚バリア」「接触皮膚炎」「蕁麻疹・食物アレルギー」という5つのテーマを取り上げました。各分野のフロントランナーとして活躍されている先生方にお集まりいただきましたので、どのセッションも最新の知識を効率よく学べる機会を提供できたも

のと思います。

パッチテストハンズオンセミナー

皮膚アレルギー診療の基本手技であるパッチテストの習得には実習によるトレーニングが欠かせません。そこで学会の支援のもと、パッチテストの知識と技術の普及を目指して、毎年3回、全国各地でハンズオンセミナーが開催されてきました。しかし、いまだに需要を十分満たしているとはいえません。そこで今回から、年3回のハンズオンセミナーのうちの1回を学術大会に組み込む形で実施し、これまで機会に恵まれなかった遠方の先生方にも、学会のついでに参加できる機会を提供することになりました。本大会では大会最終日に会場別館にて接触皮膚炎関連のシンポジウム、ランチョンセミナー、ハンズオンセミナーを行い、この一連の企画に参加することで「接触皮膚炎」のすべてを習得できるようにプログラムを工夫しました。ディレクターの関東裕美先生(東邦大学医療センター大森病院皮膚科臨床教授)をはじめとして、タスクフォースの先生方には、限られた時間内でたいへん効果的なレクチャーと実習を行って



図4 狂言. 会場の能楽ホールにて

いただきました(図3). アンケート調査で参加者のほぼ全員から高い評価を得ることができました.

おわりに

大会会場の奈良春日野国際フォーラムは, 周辺に春日大社などの社寺や春日山原始林を含めた世界遺産を有する奈良公園内にあります. 天気にも恵まれ, 雄大な自然の中で勉強に疲れた頭をリフレッシュしていただけたものと思います. また,

初日終了後には会場の能楽ホールを活かして, 狂言の公演を企画し好評を得ました(図4). 多くの参加者から会場が素晴らしかったとお褒めの言葉をいただきました.

最後に, 戸倉新樹理事長をはじめ会員の皆様, 奈良県立医科大学皮膚科学教室ならびに教室同門会の皆様のお力添えのお陰で, 実りある学会となりましたことを心から感謝して本稿を閉じたいと思います.